

「上古・中古時代の「さやけし」と「さや」語群をめぐって」

ALDO TOLLINI

国文学研究資料館 - 2010年7月8日

1. 研究の目的

本稿は、上古・中古時代の文献に現れる「さや」語群を分析するものである。「さや」語群に関する研究は、国語学のなかで比較的少ないが、調べてみると、文献に見える「さや」の使用頻度数がそれほど少なくないことが分かる。そのみならず、その語群の由来、意味、用法および表記が面白く、語彙や表記研究の分野に貢献できる一項目だと思う。語彙の研究だが、テキストの解釈など文学的な立場からの研究に貢献できると思う。

私が興味を持ったのは、「さや」語群のなかでも特に「さやけし」の表記である。それは、万葉仮名以外では、「清」という字で書かれているが、「さやけし」の意味に深い理解がなくても、「きよし」とも意味が一致せず、部分的にしか重ならない。「清」を使うのは、「さやけし」がやはり典型的な大和言葉であり、他に書きようがなかったからではないだろうか。「さやけし」のように表記しにくい語彙は古代日本語に多くある。そのような語を文字化するとき、その当時の日本人は色々工夫しながら書いたが、その語彙的な、または文化的な「ずれ」をどのようにうめたかということは言語的には非常に興味深いことである。ここでの「さや」語群の分析は、言語的なアプローチではあるが、他文化の理解にもつながるのではないだろうか。

2. 「さや」語群

「さやけし」は古代日本の文献に様々な形で現れる。意味、ニュアンス、用法、品詞は多少違うが、みな「さや」で始まるので、これらを総称して「さや」語群と呼ぶことにする。¹

「さや」語群には「さやけし」、「さやかなり」、「さやさや」、「さやぐ」、「さやなり」、「さやけさ」があるが、そのなかでは「さやぐ」が唯一動詞であり、その他は形容詞、形容動詞、名詞である。

後で詳しく述べるが、「さや」語群の使用頻度は、時代、ジャンル、文体によって差があり、語彙の頻度がそれぞれの語彙の歴史を物語っていると言えよう。

3. 作品の中の「さや」語群の頻度²

「さや」語群が上古・中古のどの作品に見られるかについて、韻文と散文に分けて、次の表にまとめた。

A. 韻文

¹ 「さや」語群という表現は日本語研究者のなかで既に広く使われている。

² 調査は、『日本古典文学大系』、岩波書店、昭和46-47、1-66巻に基づいている。「後拾遺和歌集」だけは『新日本古典文学大系8』、岩波書店、1994、に基づいている。

「古事記歌謡」(712年成立)

「さや」語群の語彙	表記
「さやぎぬ」*	「佐夜芸奴」
「さやげる」*	「佐夜牙流」
「さやさや」2回	「佐夜佐夜」
「さやぐ」	「佐夜具」

*「さやぎぬ」、「さやげる」は「さやぐ」動詞の派生語

「日本書紀歌謡」(720年成立)

「さや」語群の語彙	表記
「さやさや」	「佐椰佐椰」

「懷風藻」(751年成立)

「さや」語群の語彙	表記
「さやけし」2回	(気)爽

「万葉集」(奈良時代末期)(表記方法は別に分析する)³

「さや」語群の語彙	万葉歌番号	頻度数
さやかなり ⁴	0079, 2225, 2855,4424 , 4474,	5回
さやぐ	0133, 2134, 4431	3回
さやけし ⁵	0061, 0314, 0315, 0316, 0324, 0356, 907, 1005, 1037, 1074, 1076, 1102, 1107, 1112, 1159, 1201,1724,1737,2141,2161, 2227,3007,3234,3991,4003, 4360, 4467, 4468	28回
さやなり ⁶	0015 ⁷ ,0133, 0135, 0920, 1082, 1753, 2464, 3402,	10回

³ 『万葉集』における「さや」語群について、『萬葉集索引』、塙書房、2003年、321-322頁も参考下さい。ここに、4424番歌の「さやかに」が載っていない。

⁴ 4424番歌は「(ま) さやかに」、そのほかはみな「さやかに」。

⁵ 0314, 1076, 1102, 1121, 1159, 1201, 1724, 1737, 2141番歌には「さやけさ」、907, 1107, 2161番うたには「さやけみ」がある。

⁶ いつも「さやに」の形で現れる。

⁷ 『日本古典文学全集2』、小学館、昭和50年、72頁によれば、「さやけかり」である。

	4423, 4434	
		総計 46 回

「古今和歌集」(905 年成立)

「さや」語群の語彙	歌番号	頻度
「さやかなり」	169, 289, 845	3
「さやけし」	217, 1082	2
「さやなり」	1097	1

「後拾遺和歌集」(1086 年成立)

「さや」語群の語彙	歌番号	頻度
「さやけし」	850, 854, 1160, 1183	4

「新古今和歌集」(1205 年成立)

「さや」語群の語彙	歌番号	頻度
「さやかなり」	524, 668, 907, 1262, 1878, 1879	6
「さやけし」	413, 1552, 1780	3
「さやなり」	615	1

「新続古今和歌集」(1439 年)⁸

「さや」語群の語彙	歌番号	頻度
「さやけし」	457, 503, 2044, 2056	4
「さやかなり」	772, 842	2
「さやなり」	973	1

B. 散文

「古事記」(712 年成立)

「さや」語群の語彙	表記
「さやぎて」*	「佐夜芸弓」
「さやぎて」*	「佐夜芸帝」

*「さやぎて」は「さやぐ」動詞の派生語

⁸ 「二十一代集」の最後の勅撰和歌集。

「日本書紀」(720年成立)

「さや」語群の語彙	番歌と表記
「さやかなり」*	2回:「鏗鏘」「寥亮」

* 原文には、「鏗鏘而」と「寥亮而」であり、どちらも「さやかにして」と読まれる。

「肥前国風土記」(奈良時代初期)ほかの風土記にはない。

「さや」語群の語彙	番歌と表記
「さやけし」	1回:「分明」

「源氏物語」(1008年頃成立)⁹

「さや」語群の語彙	番歌
「さやなり」	1
「さやかなり」	27
「さやけし」	3

その中に、和歌にあるのは、「さやかに」1回と「さやけし」2回ある。

「紫式部日記」(1010年頃成立)

「さや」語群の語彙	番歌
「さやなり」	1

「更級日記」(1059年頃成立)

「さや」語群の語彙	番歌
「さやなり」	2

「伊勢物語」(平安中期か)と「竹取物語」には使われていない。

まとめて見れば:

1. 韻文に見える「さや」語群の頻度

	古歌	書紀 歌	懐	万	古今	後拾	新古	新続 古

⁹ 伊井春樹編、「源氏物語」CD-ROM, 角川書店、1999.

語彙								
「さやかなり」				5	3		6	2
「さやぐ」	3			3				
「さやけし」			2	28	2	4	3	4
「さやなり」				10	1		1	1
「さやさや」	2	1						

2. 散文に見える「さや」語群の頻度

	古事	書紀	肥風	源氏	紫日	更日	伊勢	竹取
語彙								
「さやかなり」		2		27				
「さやぐ」	2							
「さやけし」			1	3				
「さやなり」				1	1	2		
「さやさや」								

以上をみれば、韻文では、「さやけし」と「さやかなり」が多く、ほぼ同数現れる。一方、散文では、特に「源氏物語」の31回が目立つが、「さやけし」の3回に対して、「さやかなり」は27回ではるかに多い。これは平安時代に入り、「ケシ型」形容詞より、「ナリ型」形容詞のほうが多く使われるようになったからであろう。¹⁰ 面白いことに、「さやかなり」の27回のうち、歌にはただ1回¹¹しか使われていないのに対して、「さやけし」は、歌に現れる頻度が3回中2回¹²もある。このことから、「さやけし」は「歌詞」であることがわかる。韻文には、「さや」語群は古くから見られるが、散文の方には「源氏物語」を除きほとんど見られない。これらを考慮すると、「さや」語群は「和歌詞」で、散文ではほおとんど使われなかったのではないだろうか。「源氏物語」は散文の中でも例外かと思えるが、物語の長さから見ればそれほど頻度は高いとは言えない。¹³ 頻度数を総合的に比較すると、散文には「さや」語群の中で、「さやかなり」が一番多く使われている。韻文では、「さやけし」と「さやかなり」が多いが、意味が同じであっても、ジャンルにより使用頻度が異なることが興味深い。

¹⁰ 村田菜穂子、「ケシ型形容詞の周辺。語幹末尾の音節がエ列音である。ク活用形容詞について」、『甲南女子大学大学院』、第11号、平成元年1月、54頁。

¹¹ 「桐壺」の巻に。

¹² 「賢木」と「松風」の巻に。

¹³ 大ざっぱな計算で、「源氏物語」の総合877,365字に31回で、「古今和歌集」の総合59,614字に6回ある。「源氏物語」の場合、平均28,302字に1回で、「古今和歌集」は平均10,000字に1回ある。つまり、「源氏物語」よりも、「古今和歌集」における「さや」語群の相対頻度が多いことが分かる。

後で詳しく述べるが、キリシタン版の「日葡辞書」には、「さやけさ」と「さやけい」¹⁴は歌語であると明記されており、当時の人が「さやけし」は「和歌詞」だと理解していたことがわかる。

また、表の上古・中古の文献は文体により漢文脈と和文脈に分けられる。前者は漢文、漢文訓読、変体漢文など漢文あるいは漢文調で書かれている文献であり、後者は和文体で書かれている文献を指している。この表を見ると、「さや」語群はほとんど漢文脈には見られず、もっぱら和文脈に出現することは注目に値する。「さや」語群が韻文と和文脈に多く使われているのは、やはり「さや」語群は典型的な「大和言葉」であり、文字化しにくく、漢文脈には使いにくいからなのではないだろうか。

古代日本では言語状況は複雑で、中国の語彙・文字に一致しない、または一致しにくい大和言葉を漢字で書く場合、万葉仮名書きにしたり、色々な文字の工夫を考え書いたのではあるが、ジャンル、文体、そして一般的な言語環境に合わせて語彙も使っていたと言えるだろう。また、古代日本の文献を分析する際に、言語表現は表記の可能性に左右されることも考慮する必要があるのではないだろうか。

4. 語源と意味

1. 「さや」語群の語源

「さや」語群の語源は、「さや」という音の感覚の擬声語¹⁵、または擬音語¹⁶であることを主張する研究者が多い。「さや」から「さやさや」と「さやか」も派生した。「か」という語尾はよく古代日本語にみられる。たとえば、「ゆた」⇒「ゆたか」⇒「ゆたけし」(豊)のように、「さや」⇒「さやか」⇒「さやけし」が考えられる。¹⁷

「冴ゆ」という動詞と関係しているという学者も少なくない。¹⁸1. 「冴ゆ」の意味は「ひえびえとする。凍る。」2. (光・音・色などが)「澄みきる、さえる」、つまり、現代語の「冴える」の古語であるので、明らかに、「さや」語群の意味と関連している。

「さや」語群の中に、「さやぐ」という動詞も存在し、その意味は1. さやさやと音を立てる。(2) さわぐ。古代日本語の「乱る」(今の「乱れる」)に近い意味も持っている。たとえば、「万葉集」の133番歌に「乱友」の読みは、学者の間で「さやげども」と「みだれども」に見解が分かれ、論争にもなっており、また数多くの論文も書かれている。「さやぐ」は「さや」になる状態で、「乱」と書

¹⁴ 「さやけし」の「い音韻」。

¹⁵ 斎藤安輝、「「聞く」ことと「見る」こと—「さやけし」における知覚の交わり」、『産業技術短期大学誌』、vol. 32, 1998, 4頁。

¹⁶ 八木京子、「人麻呂の擬音語擬態語の表記試論—「さやに」「とををに」「ぬえとり」」、『日本女子大学大学院文学研究科紀要』、第6号、2000年、37頁と基石雅利、「名づの木やさや—「さやさや」二重用法説をめぐって」、『文学研究(聖徳学園短大)』、第1号、1986年、26-27頁。

¹⁷ 白川静、「新訂字訓」、平凡社、2005年、338頁。

¹⁸ たとえば、青木生子、「万葉ことば事典」、大和書房、2001年、212-213頁。

く理由は、その中に不安を感じうる意味も含まれているからだ。

「さや」語群の意味について、古代と中古の辞典を調べると、大体意味は一致している。擬声語、つまり、音の感覚でできた語なので、聴覚に訴える語であることは間違いない。「古語拾遺」(807年成立)に、「阿那佐夜憩 竹葉の聲なり」とあり、竹(または笹か萩)の葉が風に軽く乱されて(さやがされて)爽やかな音が立つ。その音は「さやさや」で、耳に涼しさを招き、新鮮で清いさまを表わしている。

「葦邊在 萩之葉左夜藝 秋風之 吹來苗丹 鴈鳴渡」(あしへなる をぎのはさやぎ あきかぜの ふきくるなへに かりなきわたる)(万葉歌 2134 番)

「上代語辞典」に¹⁹、「さやけし」の見出しに「さわやかである。清らかである。はっきりしている」とあり、「日本国語大辞典」に²⁰、「けじめがはっきりしている。はっきりしていて、明らかである。あざやかである。清らかである。さっぱりしている。気分的にさわやかである。すがすがしい。音、声などがはっきりしてさわやかである」と載っている。

「古語大辞典」には²¹、もうすこし詳しく「混じりけなくはっきりしていて快いさま。音が高く澄みきっていて気持ちよいさま。余すところなく、すっきりと見えて美しいさま。汚れなく、まぎれもないさま。」とある。

キリシタン時代に宣教師によって編纂された「日葡辞書」²²にも「さや」語群が載っている。

1. “Sayacana”: Cousa clara como lũa. (「さやかな」: 月のように明るいもの)
2. “Sayacani”: Claramente. (「さやかに」: 明るく)
3. “Sayaqesa”: V. Sayacana. P. (「さやけさ」: 「さやかな」をみよ。歌語²³)
4. “Sayaqei”²⁴: O estar o tempo frio, e arrepiado. Estar a lũa clara, e resplandecente. P. (「さやけい」: 天候が寒くてぞくぞくとする。月が明るくて、照っているさま。歌語)。

「日葡辞書」は、17世紀の初めごろまで、「さや」語群の意味が変わらないことを証明している。このように、「竹の葉」の爽やかな聴覚の感触から、時間が経つにつれて次第に意味が変化し、視覚感覚にも及び、たとえば、「秋夜者河四清之」(秋の夜は 川しさやけし)²⁵にあるように川を見れば「さやけし」という気持ちになる。しかし、川といたら、視覚感覚とともに、川の音の聴覚感覚も伴うのではなかろうか。耳で受け取る音から、川のように、感受性の敏感な人間は目で見る眺めも一体になり、一緒に感じるだろうと推測できる。竹の葉の音も同じように、音とともに、竹藪の風景を見ることによって、心が動く。そこに、「爽やかな」気持ちが生まれて、「さやけし」と「爽やか」の両語が結び付く。

¹⁹ 丸山林平、「上代語辞典」、明治書院、昭和42年、505頁。

²⁰ 佐藤宏編、精選版「日本国語大辞典」第2番、小学館、2006年、133頁。

²¹ 中村幸彦(他)、「古語大辞典」、第二巻、角川書店、昭和59年、727頁。

²² 1603~04年長崎学林刊。亀井考、「日葡辞書」、勉精社、1973。

²³ ポルトガル語の「P.」(Poesia)は「歌用」という意味。

²⁴ “Sayaqei”(「さやけい」は「さやけし」のイ音便形)。

²⁵ 万葉歌 324 番。

竹の葉の音の聴覚を語の起源とすれば、その音は涼しさを感じさせ、「さやけし」が「冷たい」、「涼しい」という観念に関連しており、「冴ゆ」という語と無関係でないことがわかる。また、もう一步踏み込んでみると、新鮮な音や眺めを感じる時に、気分が晴れて、心の中の悲哀が溶けて、明るくなる。その明るさは心の中の新鮮な自然の感覚から来ており、外の純粹さ、新鮮さが心の中に響き、それを感じることによって、気分が明るくなる。「さやけし」という語は、冬の雪景色に突然竹の葉の音が聞こえ、その音が静かな自然の中にはっきりと静寂を破り、純粹で、清らかな感じを伝えてくれるということである。つまり、「さやけし」は、「明るく、はっきりして、清らかな」心境をもたらすことになる。

意味上も、表記上も、「さやけし」は早くから、少なくとも万葉集のときから、「きよし」という語と競り合うようになり、この二語の意味的、用法的な区別が難しい。たしかに、「きよし」も「さやけし」も基本的に「純粹で、汚れや混じりけがなく、はっきりしているさま。澄んでいて、すがすがしい気持ちを起こす」という意味で使われ、意味がある程度重なることは否定できない。字を見れば、意味の原点がわかる：清は「水＋青」で、清らかに澄んでいる水を指している。「さやけし」は「澄んでいる音」を指し、意味の違いは、視覚対聴覚だが、時代を遡るとともに、両語とも、「覚」を超えて、一般化し、ますます意味が重なっていった。

上古と中古時代の作品には「きよし」も「さやけし」もよく使われ、意味的な区別がはっきりせず、学者の間でも、その意味範囲の違いが論じられるようになった。

万葉集以前の時代に、「きよし」の意味をより詳しくわかるのに、文献に見られる万葉仮名書き以外の表記を検討すれば役立つと思う。

「きよし」は多くの場合に、「浄」、「清」、「潔」と書いてあるが、面白いことに、「日本書紀」にその表記が多数の形をとる：「赤、清、明浄、平、潔浄、明、丹、潔、雪、灑」。

逆に、「清」という字は多数の読みで現れる：「きよし、すが、しづまる、いさぎよし、すむ、しづかなる、あきらけし」。しかし、「きよし」と「さやけし」は同じ字で書く例が見られない。²⁶

以上を考えたら、「きよし」という語と「清」という字が一致しない意味が目立つ。

「きよし」：「赤、清、明浄、平、潔浄、明、丹、潔、雪、灑」²⁷

「清」：「きよし、すが、しづまる、いさぎよし、すむ、しづかなる、あきらけし」

「きよし」と「清」との共通の意味は：「きよい、清潔、明るい、澄む、すがすがしい」²⁸があるが、読みのなかで「静か」、それから、字のなかで「赤、平、丹、雪」が異なることが面白い。意味論上で考えれば、同じ語に、または同じ字に多数のバリエーションがあれば、これらは共通の意味

²⁶ 「日本書紀」と違って、「万葉集」には、「きよし」の書き方は規則的である。万葉仮名書きでなければ、ほとんどの場合には「清」で書かれている。「浄」（1回のみ）、「不穢」（1回のみ）が見られる。

²⁷ 「さっぱりしたさま。さらさらとしてねばっこくないさま。」

²⁸ 「すが」は「すがすがし」という意味：「遂（つひ）に出雲（いづも）の清地（すが）に到（いた）ります。清地、此をば素鵝（すが）と云ふ。乃ち言（い）ひて曰（のたま）はく、「吾（わ）が心（こころ）清清（すがすが）し」とのたまふ。此（これ）今、此（こ）の地（ところ）を呼びて清（すが）と曰（い）ふ」（日本書紀）。「すが」（すがすがしい）と「灑」の意味に近い。

を持つべきことは当然だと思われるが、「赤、平、丹、雪」と「静か」はどこに共通点があるだろう。「赤」と「丹」は色彩が似ているが、「雪」とはどう結び付ければよいか。「平」と「静か」とはニュアンスが似ているし、「雪」とも雰囲気がわかるが、「赤」とはどう考えればよいか。

実は、「赤」の字は「あきらか、あきらかにする、きよめあきらかにする。まこと、まごころ」²⁹という意味があつて、「まこと」、「純粹」に使われたことがわかる。

以上をまとめれば、

1. 字:「清」、「明浄」、「潔浄」、「潔」;語彙:「きよし」、「いさぎよし」、「すむ」⇒ きよい、清潔。
2. 字:「明浄」、「明」;語彙:「あきらけし」⇒ 明るい、はっきりする
3. 字:「赤」、「丹」⇒ まこと、誠意、混じりけがない
4. 字:「平」、「雪」;語彙:「しづまる」、「しづかなる」⇒ 静か
5. 字:「灑」;語彙:「すが」⇒ すがすがしい、さっぱり

以上を見れば、「きよし」の「清」と「さや」語群の「清」は「きよい、清潔」、「明るい、はっきりする」、「まこと、誠意、混じりけがない」、「静か」、「すがすがしい、さっぱり」という日本人文化の基本的な観念を共有するので、同じ字を使うことが納得できる。

「きよし」も「さやけし」が一緒に使われている例が3つあり、「さやけし」の意味や使い方の相違を分析するときの手がかりになるかもしれない。同時に使われているということは、つまりこの二語の意味することが若干違うということであるか、あるいは使い方に相違があるということであろう。もしくは、意味、使い方いずれにも相違があると考えられる。

1. 「[...]國柄鹿 見欲將有 山川乎 清」 諾之神代從 定家良思母(くにかからか みがほしからむ やまかはを きよみさやけみ うべしかむよゆ さだめけらしも)(山川がすがすがしいので、当然、神世以来ここに定められた)(万葉歌 907 番)
2. 「[...]布知毛世毛 伎与久佐夜氣志」 淵(ふち)も瀬(せ)も 清(きよ)く清(さや)けし(続日本紀歌謡)
3. 「[...]山見者 高貴之 河見者 左夜氣久清之」(山見れば 高く貴し 河見れば さやけく清し)(万葉歌 3234 番)

万葉歌の3.番は一番面白い。分析すれば、次のように考えられる:

山見れば → 高く貴し
↓ ↓
河見れば → さやけく清し

²⁹ 白川静、「字通」、平凡社、1996、921 頁。

山は「高く貴し」、川は「さやけく清し」と言っており、山も川も二つの形容詞でその特徴を描写し、「山」の場合、1番目の形容詞は客観的な性格を示し(高く)、2番目の形容詞は主観的な意味(貴し)を表している。「貴し=たふとし」という形容詞は「品位のあるさま。りっぱだ。貴重だ。」³⁰を意味する。「貴し」は自分の中に感じる情緒を指している。それに平行している「河」の場合、客観的な意味の形容詞(清し)のほかに、「さやけし」があり、上の句と比較すれば、その意味は主観的であることは当然に思ってしまう。つまり、「山」は客観的に「高く」、主観的に「貴し」のに対して、「河」は客観的に「清し」で、主観的に「さやけし」と解釈できるのではないだろうか。

万葉集の 1005 番歌には「...山高 雲曾軽引 河速弥湍之声曾清寸 神佐備而 見者貴久 宜名倍 見者清之...」(...山高み 雲そ棚引く 川速み 瀬の音そ清き 神(かむ)さびて 見れば貴く 宜(よろ)しなべ 見れば清(さや)けし...)(...川の流れが早いので、瀬の音が清い。神々しくて、見れば貴く様子がよく、見ればさやけし...)とあり、「貴く」と「さやけし」は一緒になって、同じ景色を描いている。

「清し」は「水が澄みとほるさま。けがれがない。いさぎよい。」³¹という客観的で基本的な意味を持つが、「さやけし」のほうは、同じような意味だが、その意味は客観的ではなく、心の中に訴える意味で、しみじみに感じられる情緒を指していると思う。心の諸相を喚起する語でもあり、その意味で「見るにさやけし」という表現が多く見られる。³²

「古語大辞典」に、「(「さやけし」は)対象から受ける主体の情意や感覚についていうことが多い。。。」³³とあり、その主観的な意味を定義する。森本氏のお言葉を借りれば「(「さやけし」は)感性語の一種であり、しかも感性のもっとも鋭く感じられがちな清爽さを表現する語である。」³⁴歌にある「清し」と「さやけし」の例を見れば、その違いを確かめることができる。もちろん、古代と中古文学に見える例が非常に多いので、ここでは、数例しか取り上げない。

「さやけし」

「古今和歌集」からの例

1. 「あきはぎをしがらみふせてなくしかの めには見えずてを((お))とのさやけさ」(217 番歌)
(鹿の鳴き声を聞いたらかわいそうに思う！その鳴き声はただはつきりと聞こえるのではなく、心に深くしみ入る)。

2. 「まがねふくきびの中山おびにせるほそたに川のを((お))とのさやけさ」(1082 番歌)
(川の音はすがすがしく、その音を聞けば気持ちがよくなる)

³⁰ 中村幸彦 (他)、「古語大辞典」、第二巻、角川書店、昭和 59 年、1020 頁。

³¹ 諸橋道次、『大漢和辞典』、大修館書店、昭和 60 年、81 頁。

³² 渋谷虎雄、「「きよし」と「さやけし」『語文 (大阪大学)』、第 5 号、1954、30 頁に：「情緒的主観的形容になって」とある。

³³ 中村幸彦、「古語大辞典」、727 頁。(脚注 11 番をみよ)。

³⁴ 森本治吉、「「サヤケシ」談義」、『文学』、第 4 巻、第 10 号、昭和 11 年、571 頁。

「万葉集」からの例

- 3.「宇都世美波 加受奈吉身奈利 夜麻加波乃 佐夜氣吉見都 美知乎多豆祢奈」(4468 番歌)うつせみは かずなきみなり やまかはの さやけきみつつ みちをたづねな
(山川を見れば、心の中は純粹になって、道を求める心境になる)

「清し」

「万葉集」からの例

- 4.「月夜吉 河音清之 率此間 行毛不去毛 遊而將歸」(0571 番歌)
つくよよし かはのおときよし いざここに ゆくもゆかぬも あそびてゆかむ
(月がきれいで、川の音が清い)
- 5.「山高来 川乃湍清石 百世左右 神之味將往 大宮所」(1052 番歌)
やまだかく かはのせきよし ももよまで かむしみゆかむ おほみやとこ
(山が高く、川の瀬がきよい)

「新古今和歌集」からの例

N641

- 6.「むば玉の夜の深けゆけばひさ木生ふる清き川原に千鳥なくなり」(河原が清い)

「更級日記」からの例

- 7.「あとはかないやうに、はかはかしからぬ心地に、夢に見るやう、清水の礼堂にみたれば」(水の清い礼堂に行く)

以上の例から、やはり、「きよし」が客観的な意味を持つのに対して、「さやけし」には主観的な意味があると考えられる

意味論上の分析に役立つもう一つの要素が「さや」語群の対象になる物である。「万葉集」までのおもな資料を分析し、次の2表を作成した。

1. 「万葉集」以前の作品における「さや」語群の対象物

作品名	「さや」語群	対象物
「古事記」	「さやぎて」2回	国

「古事記歌謡」	「さやぎぬ」、「さやげる」、「さやさや」2回、「さやぐ」	木の葉2回、木2回、栲衾 ³⁵ (たくぶすま)
「日本書紀」	「さやかなり」2回	琴の音、鹿の鳴き声
「日本書紀歌謡」	「さやさや」	木
「懐風藻」	「さやけし」2回	気
「肥前国風土記」	「さやけし」1回	四方

2. 「万葉集」における「さや」語群の対象物

語	山(1)・川(2)・月(3)・磯(4)	袖(1)・葉(2)	その他
さやかに	0079(3),		2225(霧), 2855(妹のこと聞く), 4424(姿), 4474(音沙汰),
さやぐ		0133(2), 2134(2), 4431(2)	
さやけし	0015(3), 0315(1), 0316(2), 0324(2), 0356(2), 0907(1,2), 1037(1,2), 1074(3), 1076(3), 1107(2), 1201(4), 2161(2), 2227(3), 3007(3), 3234(2), 4360(2), 4468(1,2)		0061(浜), 324(川の音), 1005(大君), 1102(川の音), 1159(波の音), 2141(鹿の声), 3991(花), 4003(水の音), 4467(剣)
さやに	0920(1), 2464(3)	0133(2), 0135(1), 3402(1), 4423(1)	1082(玉), 4423(嶺), 4434(春)

「万葉集」以前は、「さや」語群の主体物のなか、「国」、「気」、「四方」のような抽象的な語彙か聴覚に訴える語彙がほとんどだが、万葉集になると視覚に訴えるケースが圧倒的に多くなる。葉の音を対象にする例は4つ、袖の音は3つ、水の音1つしかない。視覚の対象は、山、川、月を合わせて17もある。古くは聴覚的か抽象的な意味に使われていたものが「万葉集」の時代に視覚的な意味に転じ、それ以降は一般的な意味に使われるようになったようである。

先にも述べたように「万葉集」には「さやけし」という語の使用頻度が高いが、そのほと

³⁵ 繊維で作った夜具。

んどが視覚的に使われている。実際、「万葉集」以前の作品には音に訴える「さやけし」は見られない。聴覚的な意味持つ語は「さやなり」「さやに」、動詞の「さやぐ」である。

5. 「さや」語群の漢字表記

これまでに「さや」語群の意味の広がりについて考察してきたが、これらはもともと擬声語から形成された語であるから、語自体、その意味の範囲が日本の心の象徴的な語になっていった。言い換えれば、「さや」語群は典型的に大和言葉であり、古代日本人の心境、自然の接し方を表現する語でもある。

大陸から大量に取り入れた語彙と異なり、「さや」語群は日本人の心の鏡であると考えてもよからう。その意味でも漢字で物事を書き表わすときに、その語に適切な漢字をあてることは大変難しかった。日本と中国の文化的、言語的な「ずれ」が生じ、対象する言葉や漢字がない場合、いろいろ工夫しなければならなかったのである。

語彙を文字で表わす場合、漢字を音声文字として、あるいは表語文字として使った。音声文字の場合、万葉仮名書きで問題がないが、表語文字の場合、つまり字訓でかくときには、列島語と中国語の言語的・文化的な「ずれ」のため、書き表わせない場合がある。つまり、中国語に対応する日本語あるいは漢字がないことがあり得る。特に、伝統的な日本文化を表わす語彙の場合はそうである。「さや」語群は日本文化の典型的な語彙の一例であるので、表記するのは容易なことではなかったであろう。

まず、平安末期ごろ編纂された古辞書の「類聚名義抄」に、「さやけし」と「さやかなり」は「亮」、「さやかに」は「灣」とあり³⁶、「灣」は「入り海」の意味で、「さやかに」の読みが説明しにくい。

次に、漢字体で書かれた主な作品に見える「さや」語群における表記ストラテジーを検討する。

1. 「古事記」には「さやぎて」（「佐夜芸弓」）、「さやぎて」（「佐夜芸帝」）が2回、「きよし」は6回 → 清：5回、浄：1回。
2. 「古事記歌謡」には「さやぎぬ」（「佐夜芸奴」）、「さやげる」（「佐夜牙流」）、「さやさや」（「佐夜佐夜」）（2回）、「さやぐ」（「佐夜具」）の5回、「清」の字は「すがし」と読まれている。
3. 「日本書紀」には、「さやか」が2回（「鏗鏘」「寥亮」）、「きよし」は30回（赤、清、明、浄、平、潔浄、明、丹、潔、雪、灑）で、「清」の字は「きよし、すが、しづまる、いさぎよし、すむ、しづかなる、あきらけし」と読まれている。
4. 「日本書紀歌謡」には、「さやさや」1回「佐椰佐椰」だけ。
5. 「風土記」

³⁶ 望月郁子、「類聚名義抄。四種声点付和調集成」笠間索引叢刊 45、昭和 49 年、245 頁。

- I.「常陸国風土記」には「さや」語群はないが、「きよし」は「浄」、「清」と表記されている。
 II.「播磨国風土記」には「さや」語群はないが、「きよし」は「清」と表記されている。
 III.「肥前国風土記」、には「さやけし」は1回で、珍しく「分明」と表記されている。「分明」は「はっきりしていること。明らかなこと」という意味であるから、「さやけし」のと同意味として使われている。³⁷「きよし」は「清」と書いてある。

IV.「豊後国風土記」には「さや」語群も「きよし」もない。

- 6.「懐風藻」には「さやけし」は2回あり、両方とも「爽」と表記。面白いことに、どちらも「気爽」(きさやけく)になっており、「気持ちが爽やか」という意味を持つ。「きよし」は「浄」、「清」、「潔」と表記されている。

「万葉集」以前の作品における「さや」語群の万葉仮名書き以外の表記方法を次の表にまとめた

作品名	語	表記
「懐風藻」	「さやけし」	「爽」2回
「日本書紀」	「さやかなり」	「鏗鏘」、「寥亮」
「肥前国風土記」	「さやけし」	「分明」

「万葉集」ではじめて「さや」語群が広く使われるようになる。以下に「さや」語群の表記をまとめた。

1. 「さやかなり」は「左夜加尔」1回、「清」2回、「清尔」1回、「佐夜可尔」1回。
2. 「さやぐ」は「佐也久」(「さやぐ」)2回、「左夜藝」(「さやき」)1回、「乱」(「さやげ」)³⁸1回。
3. 「さやけし」は「左夜気久」(「さやけく」)が1回、「佐夜氣吉」(「さやけき」)2回、「佐夜氣久」³⁹(「さやけく」)3回、「清」8回(「さやけみ」2回、「さやけく」5回、「さやけき」1回)、「清之」(「さやけし」)2回、「浄」(「さやけみ」)1回、「清左」(「さやけさ」)5回、「明沙」(「さやけさ」)1回、「清也」(「さやけさ」)1回、「清羅」(「さやけさ」)1回、「亮左」(「さやけさ」)1回、「清焉」(「さやけし」)1回、「清潔之」(「さやけし」)1回。
4. 「さやなり」は「清」4回、「佐夜尔」3回、「清尔」2回、「清明」1回。

まとめみれば:

³⁷ 原文には「分明謂佐夜気悉」(分明を佐夜気悉(さやけし)と謂ふ)とある。

³⁸ 133番歌。読みは「さやげ」か「みだれ」か、学者の中で、議論が行われている。たとえば、野田浩子、「「さやけし」の周辺、〈清なる自然〉試論2」、『古代文学』、第24号、1985/03、八木(脚注6番をみよ)、野田浩子、「小竹の葉はみ山もさやにさやげども一「さやぎ」「乱れ」「揺れる外界」、『太田善麿先生退官記念文集』、1980。

³⁹ 「さやけし」の「け」は「氣」で書いてあるので、乙類の音節であることが分かる。

韻文に見える「さや」語群の表記

	古歌	書紀 歌	懷	万	古今	後拾	新古	新続 古
語彙								
「さやかなり」				仮名 (2) + 「清」 (3)	仮名 (3)		仮名 (6)	仮名 (2)
「さやぐ」	仮名 (3)			仮名 (2) + 「乱」 (1)				
「さやけし」			爽(2)	仮名 (6) + 「清」 (19) + 「明」 (1) + 「浄」 (1)+亮 (1)	仮名 (2)	仮名 (4)	仮名 (3)	仮名 (4)
「さやなり」				仮名 (3)+ 「清」 (6)	仮名 (1)		仮名 (1)	仮名 (1)
「さやさや」	仮名 (2)	仮名 (1)						

散文に見える「さや」語群の表記

	古事	書紀	肥風	源氏	紫日	更日	伊勢	竹取
語彙								
「さやかなり」		「鏗 鏘」+ 「寥 亮」		仮名 (27)				

		(2)						
「さやぐ」	仮名 (2)							
「さやけし」			「分 明」 (1)	仮名 (3)				
「さやなり」				仮名 (1)	仮名 (1)	仮名 (2)		
「さやさや」								

次に「万葉集」に現れる「さや」語群の中で一番多く使われている「さやけし」(17回)について考察する。「さやけし」は万葉集ではじめて多く使われるようになり、また漢字で書かれるようになりひとつの独立した「語」としての地位を得たと言えよう。奈良時代以前は「さや」語群は対象物から受けた感覚に基づいた意味を持ち、奈良時代になってからは、もっぱら視覚的、聴覚的な感覚から、次第に感性的で、抽象的なイメージや情緒を描くようになった。そのために、形容詞の「さやけし」が発達した。その傾向が特に平安時代に入ってから著しくなり、「あはれ」のような感性的で、心に訴える言葉が多くなることは知られている。「さやけし」の場合、万葉集を境に、特に韻文には外界の現象に対して感受性の語として広く使われるようになった。

日本語のそれぞれの語に適切な漢字をあてることによって日本の表記が成り立っていったわけであるが、「さやけし」の場合、おそらく対等する中国語がなく、意味に基づいた近い言葉を選んで、漢字をあてたのであろう。それが、「清」であった。万葉集に純粋な日本語が文字化される時、安定した表記の形はなく、むしろ、色々な書き方が目立つ。たとえば、「みやび」、「にほふ」をみると、

1. 「みやび」:「遊士」、「風流士」、「風流」、「美也備」、「遊」;
2. 「にほふ」:「仁保布」、「丹保布」、「丹穂経」、「丹覆」、「仁寶布」、「黄色」、「尔抱布」、「尔保敷」、「薰」、「香」、など、がある。

一方、「さやけし」は最初から表記が安定している。万葉仮名ではほとんどの場合「佐夜氣+語尾」であり、漢字で書けば「清」になる。「清」に固まったのは、「万葉集」であって、その前の資料文献には見られない。

万葉仮名で書かれているのは、4467、3991、4003、4468、4360 番歌のように万葉仮名書き専用の歌にある。このような表記環境の中に「さやけし」にも自然に同じ方法をとったのであろう。唯一の例外は、訓字仮名交じり書きの歌 3234 番歌で万葉仮名で書かれている。

それにたいして、「清」か「清+α」で書かれている歌は、すべて訓字仮名交じり書きである。結論として、「さやけし」の表記方法は万葉集にして珍しく規則的で、変化が少ないことが分かる。万葉集に「清」という字は2通りの読みがあり、「きよし」と「さやけし」だが、これを区別する表記戦略はなく、読者がどう読めばよいか困る場合もあり得る。

「万葉集」における「さや」語群の表記方法を次の表にまとめた

語	万葉仮名書きの歌	訓字主体書きの歌 (訓字仮名交じり書き)	訓字専用書きの歌
さやかに	4424, 4474	0079, 2225,	2855
さやぐ	4431	0133 ⁴⁰ , 2134	
さやけし	3991, 4003, 4360, 4467, 4468	0015, 0061, 0314, 0315, 0316, 0324, 0356, 0907, 1005, 1037, 1074, 1076, 1102, 1107, 1159, 1201, 2141 ⁴¹ , 2161 ⁴² , 2227, 3007, 3234	
さやに	3402, 4423, 4434	0135, 0133, 0920, 1082, 1753, 2464 ⁴³	

xxxxxの中の番歌は「清」で書かれており、それ以外は万葉仮名書きである(例外は脚注に示されている)。「清+α」:0015 清+明、0061 清+潔之、0079 清+尔、0314 清+左、0135 清+尔、0324 清+之、1005 清+之、1076 清+左、1102 清+也、1159 清+羅、1201 清+左。

表から、万葉仮名書きの歌には、「さや」語群は万葉仮名で書かれており、訓字主体で書かれている歌には、訓字で書かれていることがわかる。つまり、「万葉集」では、「さや」語群の表記方法はとても規則的であり、0133 番歌を別にして、唯一の例外は 2134 番歌と 3234 番歌である。

2134:「葦辺在 萩之葉左夜芸 秋風之 吹来苗丹 雁鳴渡」(葦辺なる 萩の葉さやぎ 秋風の 吹き来るなへに 雁鳴き渡る)

3234:「。。。河見者 左夜気久清之。。。」(。。。川見れば さやけく清し。。。)。

3234 番歌の場合、「さやけく」のすぐ後で「清し」が来るので、907 番歌と違って(「清々」:きよみ さやけみ)、「さやけし」は万葉仮名書きになっている。907 番歌はどちらの形容詞も「一み」とい

⁴⁰ 「乱友」=さやけども。

⁴¹ 「亮」。意味は「あきらか」である。

⁴² 「浄」。

⁴³ この歌は、「宇多手」(うたて)を別として、訓字専用で書かれている。

う助詞で終わり、3234 番歌は「さやけし」は連用形で、「きよし」は終止形なので、その接尾の違いを表すために、表記が違うのだろうか。

2134 番歌で訓字主体表記の歌に例外的に「さやぐ」を万葉仮名で書いた理由としては、八木氏⁴⁴の説が考えられる。漢字表記をやめ、万葉仮名で書くことによって、「さやぐ」を語の立場から下ろし、擬声語に戻すことになる。つまり、2134 番歌の「さがぐ」という表現は萩の葉の音を表している。

平安初期に仮名専用表記になってから、それまで万葉仮名で書かれた「さやけし」:「左夜 + α」が「佐(または左)也 + α」に変わった。

平安末期の「元永本古今集」⁴⁵には 217 番歌は:さ(左)や(也)け(介)さ(佐)で、1082 番歌は:(散)や(也)け(介)さ(散)と、永正 16 年(1519 年)版⁴⁶の「古今和歌集」に「さやけし」は、217 番歌の場合は、さ(左)や(也)け(計)さ(左)、1082 番歌の場合は、さ(佐)や(也)け(介)さ(左)と書かれている。

6. まとめ

いくつかの文献から「さや」語群の頻度を調べたことをまとめると以下のようなになるであろう。

「さや」語群は「古事記歌謡」に、「佐夜佐夜」が2回見られ、「木がさやさやする」の意味で、木の葉がゆらゆら揺れて、軽くふれ合って鳴る音を指している。「さやさや」は「さや」の二重の形で、「葉の音」の意味を軽くイメージしている。同じ意味で、13世紀初期に書かれた「宇治拾遺物語」にも、「とくさの狩衣に青袴きたるが、いとことうるはしく、さや々々となりて」という文章に「さや々々」があり、葉の音ではなく、「狩衣の袴がすれ合って、さらさらと鳴っている」という意味である。

「日本書紀」に、「さやか」は2回あり、1回目は琴の音を、2回目は鹿の鳴き声を指している。琴の音は、「鏗鏘」と表記され、寂しい鹿の鳴き声は「寥亮」と表記されている。

「鏗」は「かんかんと、かたいものがうちあたる音の形容。また、琴のさわやかな音の形容」で、「鏘」は「金属的な澄んだ音の形容。また、さらさらと流れる水の音の形容」で、「鏗鏘」は爽やかな音を言い、まさに琴の音に適切である。

「寥」は「さびしい」、「亮」は「あきらか、はっきりしている」という意味であるから、「寥亮」は「寂しく、はっきりしている(音)」をあらわしている。この複雑な表記方法は「さや」語群の文字化の難しさを語っている。繰り返して言うが、やはり純粋な日本語は中国の漢字で書くのは大変困難だったことが改めてわかる。いろいろ工夫して、適当な文字をあてることになったが、読めたかどうかは疑問の余地がある。

⁴⁴ 八木、40-41 頁。(脚注 6 番をみよ)。

⁴⁵ 「日本名筆選。元永本古今集〈下〉二 伝源俊頼筆」、二玄社、1995。第 30 と第 33 巻。

⁴⁶ 国文学研究資料館貴重書、99-2-1-2, W。冷泉・為和。(奥)永正 16 年。

「日本書紀」には、「さやぐ」という動詞で、「ざわめく、乱れる」の意味で2回見られる。1回目は「彼地未平矣」(彼の国はさやげり=彼の国が乱れている)で、2回目は「夫葦原中国猶聞喧擾之響焉」(夫れ、葦原中国は猶さやげりなり)があり、そのすぐ後に「聞喧擾之響焉、此云左擲霓利奈離」(「聞喧擾之響焉」は「さやげり」と読むべき)があり、「さやぐ」は「聞喧擾之響」と書かれ、「聞」(聞こえる)＋「喧」(やかましい)＋「擾」(乱す、乱れる)＋の響きで全体ですが、「やかましくて乱れている音」を指しているので、「さやぐ」の表記を使う。これもまた、「さや」語群の漢字表記の難しさの一例である。

「日本書紀歌謡」には「さやさや」は1回あり、木の音を指し、「佐椰佐椰」と万葉仮名で書かれてある。

「さやけし」は、「懐風藻」に2回見られ、両方とも、「爽」と表記され、爽やかな気持ちを意味している。

風土記の場合、「肥前国風土記」だけに1回見られ、「分明」(「さやけし」と書かれている。天皇があるところに行かれて、その「四方」は「分明」であったから、「因曰分明村」(よりにて分明の村といひき)で、そのすぐ後に「分明謂佐夜気悉」とあり、「分明」は「さやけし」と読むべきと言っている。「分明」とは、「ぶんめい」、古くは「ふんめい」と読み、「はっきりしていること。明らかなこと」という意味で、「さやけし」を表記する際、「はっきりしている」という意味の語を使っている。

「万葉集」以前の上古の作品の中で「さやけし」が見られるのは「懐風藻」2回と「肥前国風土記」1回だけで、わずかに3回しかない。頻繁に使われ始めたのはやはり「万葉集」からに違いない。その時から、王朝文学によくみられるようになり、擬声語、擬音語から発達して日本語の一語の地位を得た。「万葉集」以前の作品には、「清」ではなく「爽」か「分明」、つまり、「さわやか」か「はっきりしている」という意味を表す語で表記している。「万葉集」に万葉仮名ではなく漢字で書く場合は新たな表記を生み出し、「清」、「きよし」という意味で書いた。

このように時代や作品により、「さやけし」はそれぞれ異なる漢字で表記された。「万葉集」では、「清」になったが、それ以降平安時代に入ってから王朝文学には仮名書きで書かれている。平安時代の韻文をみれば、「さや」語群の使用はそれまでと違い、語群の種類が少なくなり、主に「さやかなり」と「さやけし」に限られていることが分かる。「古今和歌集」、「後拾遺和歌集」、「新古今和歌集」をあわせると、「さやかなり」は9回、「さやけし」も9回で、「さやなり」が2回。上代の作品に多様な形で現れていた「さや」語群は次第に使われなくなっていったことがわかる。これは、古代から中古への一般的な現象であるかどうかを明らかにする必要はあるが、これは次の研究課題になろう。

7. おわり

「古語大辞典」に⁴⁷、「さやけし」の意味の中で「余すところなく、すっきりと見えて美しいさま。汚れなく、まぎれもないさま」とあるが、確かに、今までみてきたように、「さや」語群の中で、特に

⁴⁷ 中村幸彦(他)、「古語大辞典」、727頁。(脚注11番をみよ)。

「さやけし」と「さやかなり」は美しさを表している語だと思われる。自然の美しさが人の心の中に響いて、しみじみと感じる「美」である。つまり、自然と人の心を結ぶ語で、爽やかな気持ちを感じさせる。両語が指している「美」は客観的な感覚が主観的になり、自然の「神秘」が伝わる語である。こう考えると、両語が指している「美」は「秋の鹿の鳴き声」のように不可思議なニュアンスを持ち、古代日本人の自然感を象徴的に描いている語でもあると言える。また、「はっきりしていて、明るくて、汚れなく、まぎれもないさま」という基本的な意味を考えると、古代の日本人の自然感だけではなく、自然を超えた精神的な次元に訴える語でもある。純粹で、清い「神」の世界に導く観念を表している語なのではないだろうか。⁴⁸自然の美しさだけではなく、自然の汚れのない世界を浮かせるといえよう。汚れのあるこの世を超えて、自然の根本的な「清し」を喚起する語であるのだ。

古代日本人は自然に触れ、その自然の「美」を視覚的にも聴覚的にも受けながら、その神秘性を感じ、それを言葉に表現した。「さやけし」、「さやかなり」が韻文の和文脈によく使われる語であることはわかるような気がする。

「天皇異(あやし)みて琴に作らしめたまひしに、その音鏗鏘(さやか)にして遠く聆(きこ)えき。」
(日本書紀歌謡)

⁴⁸ 「さやけし」は907番や1005番の万葉歌のように、「神」と一緒にとときどき現れる語である。